

じんけん ぶんか まちづくり

一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会

第34号 (2012年3月)



第34号目次

- 表紙 /1
- 第34目次・表紙の写真「青い鏡」 /2
- 評議員のページ「自殺報道と思考停止に思う事」 /3
- 理事のページ「『ワールドカフェ』と『みつばちブンブンカフェ』」 /6
- 理事のページ「『人の世に熱あれ！人間に光あれ！』から90年 /11
- 報告「新しい部落史を学ぶ」 /12
- 楽遊ガイド「1945年8月15日、朝日新聞社を辞職したジャーナリスト、むのたけじ。96歳。現役。」 /13・
- 報告「第2回人権サロン『連続大量差別はがき事件』に学ぶ」 /15
- 映画評「TESE」 /20
- 報告「解放大学を受講して」 /22
- 豊中地域から「『保育教育協議会』では、今……」 /24
- 報告「ひゅうまんプラザ講演会『近代の女性問題と青鞥』」 /25
- 蛍池地域から「地域から『人権と共生』を考える」 /26
- 書評・この1冊「最後の色街・飛田」 /27
- あとがき /28

表紙の写真「青い鏡」

1967年8月にできた豊島公園（阪急宝塚線「曽根」駅下車）は、豊中市のほぼ中央に位置し、ローズ球場やテニスコート、バラ園などがあり、市民の憩いの場になっている。

写真は、バラ園の中央にある噴水で、2月3日の朝7時半に撮影したもので、そのときの気温はマイナス4.5℃と記録されている。薄い氷が青空を映し、青い鏡になっていた（印刷は色がうまく出ませんでした）。氷が張ったり、雪が降ることはまれな豊中だが、やはり今年の冬の寒さは格別だ。しかし、連日の大雪にみまわれている日本海側の各地や東北・北海道の厳しさは、想像を絶する（すでに100人以上の犠牲者が出ている）。

鉛色の空から降る雪を見上げると黒っぽく見えるが、降り積もれば、何もかもを白一色にしてしまう。夜の闇は雪を呼び寄せ、雪あかりとなる。1908年1月21日、釧路駅に降り立った啄木は、

さいはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

と詠んだ。今年は、啄木没後100年でもある。（事務局：ささき）

【山口 博之（評議員）】

はじめに

自殺者数が3万人を越えたまま、既に13年が過ぎています。この事が大問題とされ、「自殺対策基本法」が作られて6年目になります。私が非常に気にすることは、昨年度、多くの新聞と週刊誌で読まれる「自殺者の70%はうつ病」との記事です。私が精神障害者の当事者相談員として、患者の話を聴いていると、患者自身やその家族の認識に、「自殺が増えたのはうつ病が増えたから…」と言う人が増えている事です。これは、「簡単な結論を得て、判ったつもりになる事で、それ以上を考えない」意味での「思考停止」となります。今回はこの事について書いてみます（以下、この社会的な「思い込み」に対する批判記事と私の原稿を紹介します）。

新聞記事から

2011年10月4日の産経新聞夕刊、文化欄で野田正彰氏が「自殺防止キャンペーンの果て」と題した文章を載せています（紙面の都合上、少しだけ問題点をピックアップしました）。

- ・ 毎年の予算が124～246億円使われ、地域自殺対策緊急強化基金に100億円が追加されているが、自殺が一向に減らないのはなぜか？
- ・ 自殺対策白書には、自衛隊・警察や公務員の少なからぬ自殺に対するデータがないのはなぜか？
- ・ 厚労省の患者調査では、この10年で44

万人から104万人に増える事は伝染病でもない病気の急増のおかしさ。



・ 抗うつ剤年間販売高が170億円だったのが、1000億円（約6倍）になっているおかしさ。

・ 短時間診療で抗うつ剤の投与のみよりも、「抑うつ状態」になった人への環境整備や精神療法が必要ではないか？との意見が表されていました。

私の思った事

国はうつ病と自殺には密接な関係があるとして、2010年から「2週間以上、不眠が続いたら精神科の早期受診」を呼びかけています。私は、うつ病への適切な対応は自殺者減少に寄与すると思いますが、安易な医師の対応はいたずらに患者を増やすと思います。また、うつ病の患者の多くが持っている「申し訳なさ」や「すまなさ」の感情を煽るような「自殺の原因はうつ病が増えたから」との断定は、当事者を深く悩ませる原因となっているので、下記の原稿を「CIL豊中」のピアカウンセラーやコーディネーターへ配りました。

ピアカウンセラー並びにコーディネーターの皆様へ

自殺の原因はうつ病か？

現在、自殺予防が語られ、その取り組みが考えられています。報道・ニュースで皆様が目にする事の多くは“自殺者の70%はうつ病になっている”との報道です。ここで気になる事は、題字の通り、「自殺の原因としてうつ病を考えている人が少なくない事」です。これは間違った常識を生み出しかねません。

★「うつ病」や「自殺」は、心理的状況(本人の思い込みも含む)や社会的状況により、追い込まれた結果であり、結果の原因を「うつ病」という結果をもって判ったつもりになる現在の風潮に危うさを感じています。

※確かに「うつ病」は自殺につながり易さを持った病気とされていますが、先に書いた通り心理的・社会的状況に追い込まれた結果の発病であり、自殺も追い込まれた個人の出した結果です。「自殺が増えたのは、うつ病が増えたからだ」と簡単に結論づける風潮よりも、「何故に個人が追い込まれる状況が多いのか?」と考える事が大切です。

★「自殺」という大きな問題解析・分析等に、「医療は何が出来るか?」を考えるのは大切です。しかし「うつ病」者にとって大きな負担にもなり易い社会の風潮があることも、心に置いて下さい。



また私は、昨年まで「大精連」(ぼちぼちクラブ)代表をしていましたので、

機関紙に次の原稿を載せています。

近頃、気になること・・・

自殺報道と社会の受け止め方や風潮へおかしいものを感じます。例えば、少子化問題が語られたころ・・・子どもを産む者の100%は女性だとする前提のもとに、「なぜ女性は子どもを産まなくなったのか」をテーマに、女性の晩婚化・不妊等が語られた結果、多くの独身女性や子どもがいない奥さんが、自分の責任を問われた様に思い、悩み苦しんだことがあります。これは、男性の晩婚化や独身の増加・男性不妊を考えていない思考停止状態だったからです。

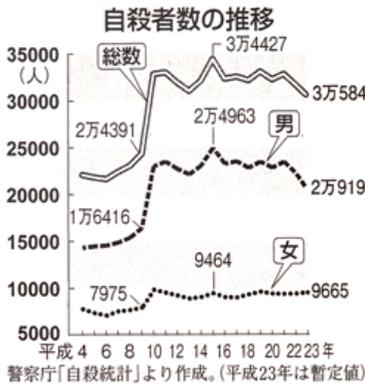
さて、話を自殺に戻します。報道では、自殺者の70%がうつ病とされていますが、この割合の高さをもって思考停止状態になり、うつ病を自殺の原因とする風潮がありますが、これは間違いです。割合の高さとその原因は別のものです。例えば、自殺者の70%が男性ですが、自殺の原因は男性ですとは言わないでしょう?

私たちは心理的状況や社会的状況に追いつめられた結果、病気になります。普通に暮らす人でさえ心理的・社会的においつめられた結果、自殺する社会的状況があります。病気は結果であり、原因ではありません。

また最近では、産経新聞(2012年2月7日朝刊)の「自殺防止」、副題に「薬ではなく悩み解決策を要望へ」と書かれた記事が載っていました(5ページ)。自殺原因をうつ病とする安易な決めつけ、自

自殺予防に名を借りた安易な対応はうつ病や自殺者をいたずらに増やす結果につながりかねません。なお、国がうつ病を自殺防止の重要課題としている事から、多くの自治体が自殺問題を保健所中心に

扱っているにもかかわらず、豊中市は「人権問題」として位置づけている事は、大変立派な意識が働いていると思います。



早期受診の効果不明

警察庁の「平成22年中における自殺の概要資料」によると、自殺の7割が男性。年代別では50代が18.8%で、60代(18.6%)、40代(16.3%)、30代(14.5%)と続く。

原因は「健康問題」がトップで48%（「鬱病」含む）。次いで「経済・生活問題」（22%）、「家庭問題」（13%）、「勤務問題」（8%）など。

NPO法人「ライフリンク」（東京都千代田区）などが自死遺族から聞き取りまとめた「自殺実態白書2008」によると、自殺の要因は「過労」や「職場の人間関係」「失業」「家族の不和」「鬱病」など、平均4つの要因が複合的にからみあいながら起きているという。きっかけは、社会経済的な問題であることが多い。

国は鬱病と自殺には密接な関係があるとして22年から、2週間以上不眠が続いたら精神科の早期受診を呼びかける「睡眠キャンペーン」を全国的に実施している。

しかし、全国に先駆けて19年から同キャンペーンを実施し、精神科の早期受診を勧めてきた静岡県では自殺者は19年の804人に対して22年は854人で、効果は確認されていない。

薬ではなく悩み解決策を要望へ

自殺防止国民運動本部は、中小企業経営者や個人経営者らの借金苦を助け、再起を自

映画製作し啓発

「大震災の越克・生命の輝き」を製作。「鬱病などの薬では悩みの原因は取り除けない」と、人と人との結びつきと具体的な支援で自殺を防ぐことに取り組んでいる。（村島有紀）

自殺防止 民間が具体的支援



「大震災の越克・生命の輝き」のワンシーン。主人公の男性は、ボランティアの支えて自殺を思いとどまる（自殺防止国民運動本部提供）

原因を除く

映画の中には「精神科の治療だけでは自殺は防げない」というメッセージが込められる。同本部の平林明紀事務局長は「自殺対策基本法施行後、5年間で医療機関の受診者と抗鬱剤など向精神薬市場は増えたが、自殺者の数は減っていない」と指摘する。

原因を除く。族や家など全てを失い、生きる気力を失いながらもボランティアとの関わりで大事なものを思い出すというストーリーだ。東京都の石原慎太郎知事や、筋萎縮性側索硬化症で療養中の徳田虎雄・医療法人徳洲会理事長、清水洋・事業再生研究会会長らがメッセージを寄せている。

そのため、同本部は1月27日、①個人個人の状況に応じた適切な支援体制の構築②事業生成型の法律運用について普及啓発③安易に精神疾患とする根拠の乏しい診断と、さまざまな医療の規制への提言を公表。借金苦には借金の整理方法、失業には仕事の紹介など具体的な対策を取るよう厚生労働省などに求める。

平林事務局長は「現在の支援体制は個人個人の悩みが全て『精神的な問題』にすり替わり、医療につなげられている。重要なのは薬で悩みをこまますことではなく、悩みの原因そのものを解決することだ」と話している。

映画とメッセージを収録したDVDは希望者に無料で配布（送料負担）。問い合わせは同本部フリーコール0120・7830・68。無料相談も受け付けている。

理事のページ

「ワールドカフェ」と 「みつばちブンブンカフェ」

2月の初めに熊本に行ってきた。それは、第26回人権啓発研究集会2日目の分科会「これからの人権啓発 新しい学びのデザイン」を運営するためであった。この分科会は、「おとなの学び研究会」という自主的な勉強会が中心になって企画して当日も進行したのだが、私もそのメンバーのひとりである。この会は毎月集まって「まじめなおしゃべり」をしているが、生産性はけっこう高く、これまで『おとなの学び』『おしゃべりの道具箱』（解放出版社）、月刊『ヒューマンライツ』の特集「ことば・表現・差別 再考」、連載「私の変わり目」を生み出してきた。最近では、もっぱら「学びの場」をいかに活性化するかという議論を楽しく行っている。ここでは、熊本での分科会をどのように進めたのかについて紹介しながら、「学びの場」のあり方について考えてみたい。

【西村 寿子（理事）】

◆「ワールドカフェ」

「ワールドカフェ」というのは、組織や社会のありようをどう変えていくか、重要な問いや課題について全員参加で話しあう方法である（鎌仲ひとみさんの映画「みつばちの羽音と地球の回転」のメイキングビデオのなかにもスウエーデンの自治体関係者がワールドカフェで話しあう場面があったことを思い出した）。

分科会当日は進行役の岡田耕治さんが「ワールド」には、「よのなか」という意味があることに引きつけて、次のように分かりやすく説明してくれた。

「よにんひと組で

のんびりカフェにいるように

なかには席を替わったりして

かんじんな話題や質問についてまじめなおしゃべりする」

この日は、月刊『ヒューマンライツ』で特集した「ことば・差別・表現 再考」のいくつかの記事を浮穴正博さんが紹介して、それを切り口にしながら参加者は「ワールドカフェ」という話し合いの方法を経験することになった。

具体的には、参加者が4人一組になって最初は短く自己紹介をして、「ことば・差別・表現 再考」の記事を手がかりにして自分の意見や経験を語りあう。数分後には1人を「ホスト」として残して、3人は別々のグループに散っていく。設定されている時間にもよるが、3ラウンドくらい繰り返して元のグループに戻っていく。

このように説明すると「なんだ」と思う人もいだろう。「こんな簡単なことで90分も120分ももつのか」とか「大人数でできるのか」という疑問もわいてくるかもしれない。もっといえば「やって何になるんだ」と思う向きもあるかもしれない。正直に言うとも私も最初にやったときは「ほんまに90分もつ？」と思ったものだ。ところがどっこい。

熊本でも分科会には140人近くが参加して会場は満杯状態だった。事前に配布されている受講者ノートにも「ワールドカフェ」という参加型の学びを経験するとうたっていたせいも、4人グループになるときもスムーズで、話し合いもいきなり本音トークで始まった。

私も話し合いに参加させてもらったが、福岡県から参加されたおしゃれな住職さんと熊本市内の教員と同じグループになった。住職さんはお寺に元死刑囚の免田栄さんを招いてお話しを聞くなどユニークな活動しておられるが、このグループで盛り上がったのは「みんな(ものの捉え方が)出来上がっていて、それを問い直す力が失われている」ということだった。だから免田さんと聞くと、「あの人は犯人でしょう」という反応が即座に出されるという。小学校の教員をされている方は「インターネットを使うとすぐに情報がでてきて便利になりすぎて考える力が失われている」と語っていた。この方は、子ども達に「インターネット上の情報は必ず根拠を確かめろ」と日頃から言い続けているそうだ。

この日、出会うまで接点のなかった方たちとこのような話を気軽にひきだせる「ワールドカフェ」という仕掛けは面白い。

分科会では、4人グループで10分くらい話しあうのを3回繰り返して4回目に元のグループに戻り、午前中の学びを振り返った。

◆「みつばちブンブンカフェ」

午後からは大学の授業や企業研修で学び場をどうつくっているか、という報告を4人から10分ずつ受けた(発表者は、浮穴正博さん、企業の大西英雄さん、竹内良さん、西谷隆行さんだ。『ヒューマンライツ』の読者にはおなじみの名前かもしれない)。そして、参加者はまた午前中のように4人グループをつくって話し合いに入る。

このグループでは、これまで経験した中で「うまくいかなかった学び



の場(研修)」を出しあい、それをA4の紙に2行くらいで書く。たとえば、「参加者が少ない上に講師が準備不足であたふたした研修」などと書く。つぎに、うまくいかなかった研修を次回にどうすればうまくいくなかという設定で、問い(A4の紙)を持って、グループの1人が「みつばち」となって蜜(解決策)をもらうために他のグループに飛んで行く。そして、そのグループで解決策を話しあってもらい、それを持って元のグループに持ち帰って報告する。

その流れを岡田耕治さんが整理してくれたが次のような流れになる。

1. うまくいったことを話しあう(4人の発表)
2. うまくいかなかったことを話しあう
3. みつばちが飛んでいって解決策を考える
4. もとにもどって収穫を共有する

この「みつばちブンブンカフェ」は、分科会の1週間くらい前の「おとなの学び研究会」で議論し、実験し、命名した方法で試してみるのも実は初めてだった。

会場をまわっているといろいろと「うまくいかなかった研修」の経験が話しあわれている。そのうちのいくつかを出してみよう。

- ・参加者が寝てしまう研修
- ・当事者がいるのでそのテーマの研修ができなかった
- ・ある県の町内会で年1度の研修で「同和研修はもういらぬ」という発言があり、その意見が支配的な意見になった研修
- ・参加者が集まらない研修

講座企画や講師経験のある人なら思い当たることも多いのではないだろうか。分科会では他にも「うまくいかなかった研修」のケースが出されていたが、ケースを出した本人たちがこれまでは相談する機会もなく、ある種自分のなかで「傷」になって残っている経験であるようにも感じられた。分科会は、地域や職場のしがらみから離れて自由に語ることができる安心な空間と感じられる雰囲気がつくられていたためか、「うまくいかなかった研修」について出し合い、それに対する解決策を和気あいあいと議論することができた。

分科会では、「みつばち」が元のグループに戻って解決策を共有したあと、いくつかのグループから発表した。どんな処方箋が出されたのか、少しだけ紹介する。

事例1. 参加者が寝てしまう研修

この問いを出した参加者は企業で新入社員研修を担当している。4月末頃に夕方6時半から8時などの設定で研修を行うと寝てしまう社員が続出するという。

処方箋は、まず「90分も話だけで起こしておくのはそもそも無理」というもの。ではどうするか。解決策を話しあったグルー

プは教員が多く、「授業でも生徒が集中できるのは50分のうち2分」ということだ。そこで、

- ・つかみを練る
- ・聞いたことは忘れるのでできるだけ活動を盛り込む（話しあう、筆記する、実験する）
- ・質問をして一定の緊張感を保つ、などの工夫がいる

事例2. 当事者がいるのでそのテーマの研修ができなかった

この問いに対しては次のような処方箋が出された。

- ・当事者がいるからそのテーマの研修ができないという捉え方そのものが「差別的」ではないか
- ・まず、研修を行いそれを通して学ぶことが大事だ
- ・すべての研修は当事者が参加しているという前提で組み立てられる必要がある
- ・企画者の思いをテーマ設定や場のつくりかたに込める。「ワールドカフェ」は使えると思う

事例3. ある県の町内会で年1度の研修で「同和研修はもういらぬ」という発言があり、その意見が支配的な意見になった研修

この事例を出した方は、すごく勇気が必要だったと思うが処方箋として出されたのは、

- ・なぜそう思うのかを発言者に聞く（そのことを通して研修の持ち方自体にも課題があったかどうかを振り返ることがで

きる)

・他の参加者にもどう思うか聞いてみる
(参加型で研修を進めると「とんでもない意見がでるのでは」と危惧する向きもあるだろう。しかし、参加者に信頼をおいて考えると全員が極端な意見を言うことはないので、極端な意見も相対化することができる。)

事例4. 参加者が集まらない研修

この問いに対しては、著名人を呼ぶとか、付加価値を付けるなどの処方箋が出されて、「うーん」と思っていたら、参加者からも「それは違うのではないか。人を集めるのが目的になってはいけない」という意見が出されて少しホッとした。

分科会ではいくつかのグループが発表してこの日、実践事例を報告した4人が一言ずつこの日1日の学びを振り返って発言を行った。その中で心に残った言葉がいくつもあるが、学びの場をつくる上で大切だと感じたことを紹介したい。

浮穴さん「社会教育の場で気をつけてきたことは、講座で暇そうな人をつくらないこと。ワールドカフェでも暇そうにしているグループがあれば立ち止まって話に入る」。

大西さん「おとなのまなび研究会では、今日の分科会までに何回も会議や合宿を持って組み立てを議論してきた。その積み重ねの上



重ねの上に今日がある」。

竹内さん「職場ですべての人

が元気になる人権を考えている。～してはいけない、ではなく元気にする人権。“個”を大切にすることだが自分の言動としては「言ってもいいよ」というメッセージを出していきたい」。

西谷さん「研修をする際に常に考えていることは自分が何を伝えたいのか、ということである」。

分科会が終了した後、何人かの参加者から「午後の3時間があっという間だった」「新鮮だった」という声をかけてもらった。

◆学びの場のデザイン

「ワールドカフェ」は岡田耕治さんがアイデアを提供してくださり、その後、数々の実践を積んで今回は「みつばちブンブンカフェ」という応用形も生み出した。

「ワールドカフェ」や「みつばちブンブンカフェ」の特長として現時点で次のようなことが考えられる。

①参加をしつつ学ぶこの方法は、きわめて自由度が高い。参加者など諸条件によって、テーマ設定、時間設定などを工夫することができる。

②とはいえ、進行役に必要な要素もある。どんな発言が出てきても参加者と共に解決できるという参加者への信頼。加えて、対等な関係の中で行う対話によって新しい認識が生まれることへの確信である。

③新しい知識を獲得することだけではなく、自分自身の変化、変容を「学び」として捉えることである。

今回、「ワールドカフェ」に参加して私が得たキーワードは「自己を捉え直すから」である。出来上がってしまっている自分を相対化して、自分自身がどのような要素で構成されているのかに気づくためには、立ち止まって考えることが何よりも必要だ。

しかし、今日、「立ち止まって考える」ということもまたきわめて難しくなっていると思う。そのための一つの方法がこの「ワールドカフェ」だろう。

私自身の継続テーマであるメディア・リテラシーもメディアからの情報を多面的に見つめることを通して自分を見つめ直すという意味で、立ち止まって考えることにつながらると思う。

余談だが、ワールドカフェ的方法とメディア・リテラシーを組み合わせるとどうなるのか（組み合わせられるのか）、やってみたら面白いかもしれない。

今回、熊本で開催された人権啓発研究集会で分科会を運営することを通して、人権の学びをつくろうと努力する人びとが面としても広がっているし、新しい学びのあり方、コミュニケーションのあり方を求めるという問題意識も深まっていることを感じた。また、この分科会は女性比率が高かったことも嬉しいことであった。受付が始まる前から会場に来て「満員になって入れなかったらいやだから」と言ってくれた女性。「おはようございまーす」と参加者から大きな声であいさつされたりと、始まる前からテンションの高さを感じていた。最初にふれた「おとなの学び研究会」の活動は、今年で5年目にはいるが引き続

き「学びの場のデザイン」をテーマにしていくことになると思う。

この会はとにかくフットワークの軽いメンバーが多く、しかも、実験や実践することに躊躇があまりない。メンバーは仕事だけではなくいろいろな活動で忙しいが、休日に開催する研究会には休むことなく参加している。ある人曰く「欠席したらソンだと感じる」。また別のメンバーは、「仲間をつくって即実践するのが大事」だと言う。

最後に3月18日（日）に行う「ワールドカフェ」の宣伝をさせていただいて、終わることにする。

いっていいかも2012 第2回月刊『ヒューマンライツ』 読者・執筆者交流会

「人権啓発」という当初は部落差別をなくすことを目的とした長年の営みは、現在、多様な諸課題を対象にして、学びの場の組み立てや教材の開発がなされています。長らくこの取り組みに携わっている方々、あるいは最近になって参加するようになった方々、経験の違いはあると思いますが、現在の社会状況の中で求められる「学びのデザイン」とはいかなる内容や質なのか、共に考えてみませんか。

“3人寄れば文殊の知恵”と言いますが、「おとなの学び研究会」の経験からも一人で悩むのではなく、対等な関係のなかで対話をしていると、思いも寄らないアイデアを得ることができます。

現在、『ヒューマンライツ』で連載中の「私の変わり目」（2010年5月号～）は、人が何を契機にももの捉え方や行動を変

えていくのかを考えるヒントとしても読むことができます。

そこで昨年を引き続いて、「私の変わり目」を手がかりにしながら「ワールドカフェ」で語りあい、これからの「学びのデ

ザイン」について考える場を持つと思います。「ワールドカフェ」というのは、参加者の「気持ち」と「ことば」を引き出すコミュニケーションの手法です。どうぞお気軽にご参加ください。

・テーマ ワールドカフェで語りあう

「いま必要な学びのデザイン～『私の変わり目』をてがかりに」

進行役 おとなの学び研究会

・日時 2012年3月18日(日)午後1時半～5時(終了後、懇親会あり)

・会場 HRCビル4F 第1研修室

・参加費 500円(会場費) 懇親会費は別途集めます

・主催 おとなの学び研究会／(社)部落解放・人権研究所

申し込み 3月12日(月)をめぐりにファックスあるいはメールでお申し込みください

(お名前、連絡先、所属、参加人数)。

その際、懇親会の出欠についてもお知らせください(会費 3000円くらい)。

この件に関するお問い合わせは、部落解放・人権研究所 編集販売部(西村寿子)まで。Tel 06-6581-8638 fax06-6581-8540 メール hreditor★blhri.org(★の部分 に@を入れてください)

理事のページ

世界でもあまり例のない266年間続いた徳川幕府は、「明治維新」によってもろくも崩れ去り、世は明治時代を迎える。この時代、それまであった徳川時代のあらゆる制度が大変革を余儀なくされた。

被差別部落についても、1871年(明治4年)8月28日「太政官布告第61号(賤民廃止令)」、いわゆる「解放令」が出される。ムラ(被差別部落)の人は各地でお祝いをした。西浜では太鼓を出してお祭りをしたという記録がある。しかし、従来彼らを差別してきた他の民衆の中には、これに反発するものがあり、被差別部落を襲撃し、焼き討ちにする事件を起こしたりした(解放令反対一揆)。また、奈良では「あのお触れは、五万日の日延べになった」とのデマが流された

「人の世の熱あれ！人間に光あれ！」から90年

【前田 勝正(理事)】

り、西日本では、「解放令」が出された日から何ヶ月も遅れて知らされたムラも多数あつと記録にある。

なぜ、このようなことが行われたのか、今一度、歴史を読み直し、検討しなければと思う。そこには深い日本の負の歴史が見えてくるように思えてならない。

その後、51年が過ぎ、京都・岡崎公会堂で1922年(大正11年)3月3日、全国水平社創立大会が開かれ、「全国に散在する吾が特殊部落民よ團結せよ！」と宣言が発せられた。全国各地から三々五々集まる、荒馬にまたがって来る人、

わらじがすり切れて足から血が滲み出ている人、公会堂に着いて感激のあまりバツタリと倒れる人など……。少年が学校での出来事を、娘さんが結婚について、差別の痛ましさを、むごさを涙ながらに語る……。人間を返せ、今誇りうるときが来たのだと（当時のことは知る由もないが、想いは熱く伝わり、人間模様が眼に浮かぶようだ）。

「人の世に熱あれ！人間に光あれ！」との宣言から90年がたった今、人間の血は涸れずに熱く伝わっているだろうか？昨年3月11日、東日本を大地震と大津波、福島原発事故という三重苦が襲った。17年前に経験した「阪神淡路大震災」を思い出した。神戸の長田のある被差別部落に炊き出しに2日間行き、また、1月19日には姉と妹を尋ね、神戸の町を一日中探し回った体験から、震災の被害はよ

り弱い人に重たくのしかかると思った。劣悪な木造のアパートに住む人には二次被害が襲ってくるのではと思った。つい最近、神戸の町を歩いたが、あの17年前の惨事はどこにいったのかと思うほどで、平清盛ブームにわいている姿をそこに見た。

福島原発事故で思うことは、危険な原発は消費地（東京）から距離をおき、いつも安全な所で生活し、危険については我知らずで、これは被差別の仕組みに似ているということだ。一定の距離を保ち物申す、私らの知ったことではない、関係ないと。その言葉が人を傷つけ、差別におとしやる。もう一度振り返ろう。90年たった今、何が解決され、何が問題なのか。今こそ、人々の絆を大切に、差別の根を摘み取るために解放の種をまこう！

報告

「新しい部落史」を学ぶ

2月7日、ホテル・アイボリーで、「豊中企業人権啓発推進員協議会」と当協会との交流会が行われ、「いま、学び直す『新しい部落史』」と題して、上杉聡さん（大阪市立大学人権問題研究所特別研究員）の講演（2時間）がありました。

最近の部落史研究成果を踏まえた刺激的な話は、時間の長さを感じることがありませんでした。私もその一人ですが、多くの人たちがなじんできた被差別部落の起源についての説明は、江戸幕府による「士農工商えた非人」の身分制にあるというも

のでした。そして、これは今日もな「常識」となってい

ます。しかし、上杉さんは、これは間違いであるとはっきり言われました。

そもそも「士農工商」というのは、江戸時代の文献に一度たりともでてきていない。元々は、中国の周の時代以前にさかのぼる言葉で、「民」の職業分類としてあったもので、その意味は、職業を問わず誰でもみんなということ。そして、「士」



とは武士を指すのではなく、一から十まで知っている、いわゆる専門家を指す（弁護士、保育士、看護師、消防士など）。

江戸時代の身分は、「士農工商」ではなく、武士と百姓、町人の三身分である。部落は、これまで「最底辺」とされてきたが、「社会外」(秩序外)に位置づけられていた。だから、今、使われている小中学校の教科書（2005年検定）には、かつてのような「士農工商」は出てこない。

これまで描いてきた部落のイメージはこれで崩れてしまいます。じゃあ、「社会外」ってどういうこと？となる。そこで、古い絵地図を見ると、町から離れたところにあっても、町中にあっても部落は堀で囲まれ、一般地区と隔離されていることがわかる。また、古文書をひもとくと、「穢多は四民の外にして」「元来人外の者」、あるいは「人交わり仕りまじく候」「四民中に齒せしめざる者

なり」などとある。武士と百姓、町人の社会の外にあって、つき合いをしない、禁じられていたことがわかる。

これ以上は手に余るので、最後に云われたことを記して終わりたい。

部落差別の歴史を見ると、差別することが「慣行」として千年間存在し続け、さながら岩盤のように社会に食い込んでいる。そして、これは16世紀中頃に制度化されたが、1871年の「解放令」で廃止された。2012年現在、慣行（岩盤）はなお生きているが、人間が歴史の上でつくったものはなくすことができるはずだ、と結ばれた。

問題は、いかにしてそこ（部落差別の解消の地点）に至るのかということですが、それを明らかにするためにも、部落差別とは何か？どうしてできたのか？を問うことが必要です。示していただいた新たな知見に基づき、その問いへの答えを探したいと思います。

【佐佐木 寛治（事務局）】

楽遊ガイド

1945年8月15日、朝日新聞社を辞職したジャーナリスト、むのたけじ。96歳。現役。

3～4年前、書店の新刊コーナーで「むのたけじ～」を見かけ「ソツ元気なんや・vと手にしたのが②でした。彼と住井すゑさんには忘れられない思い出があります。

若くして亡くなった先輩、Mさんから「これ読んでみいや…」と薦められたのが

①と彼女の『夜あけ朝あけ』でした。Mさんが山根センセや溝口さんと知り合いだったことで、児童館で勉強をみたり、プール番をすることになったのです。1965年頃だったでしょうか。Mさんとは、その後、部落解放運動をめぐる論争で袂を別つのですが、現在の私が在ることのきっかけとなっています。

単純な私は、①の略歴にぞっこんとなりました。

「戦時中、新聞記者として従軍し、ウソをホントと言いくるめるコトバへの憎悪、モジへの呪詛を痛感した筆者は、昭和20年8月15日、敗戦の日、筆を折って朝日新聞に辞表を投じた。以来、郷里の横手（秋田県）に帰り、ウソをウソと言い、ホントをホントと言えるコトバの真実を求めて個人経営の週刊新聞「たいまつ」を刊行、民衆とのホンモノの対話を生みだすことにその生涯をかけて努力を続けている」

「私が尊敬する人物が二人いる。本当の意味で民衆のために闘った人、それは、田中正造と、松本治一郎です」と語っています。朝日新聞に入った、1940年秋、はじめて言いつけられた仕事は、『破戒』についての学芸欄の記事がよくない、というので、理由もわからないまま、全国水平社に詫びにいき、つきあいはじまったということです。53歳と25歳でしたが、わけへだてないつきあいをしてくれた、と語っています。

後年、解放同盟の集會に招かれたとき、差別語にかかわって、言いたい放題言った時、芦原橋に何度も通って話をした、「だから、だめになってしまったのが本当に悲しい」というくだりがでてきます。寺

本さんと二つ違いなので、40年の時は、遭遇はなかったでしょうが、このときは会って、話し合ったのではないかと想像をたくましくしています。個性の強い、熱い二人が静かに時間を忘れて対峙し論争する図は、想像するだけでゾクゾクします。その場にいたかったですねえ…。風貌も似てるんですよ。



8月15日に辞職し、1991年には「ジャーナリズムはどうにくだばった…」と語った彼は、③で「脳天に痛棒」を食らったと言っています。59年目の2004年、琉球新報社が、新聞社に用紙やインクなどがあつたら、沖縄での戦闘について、このように報道しましたと、「沖縄戦新聞」を14回にわたって発行しました。これを見て「しまった、8月16日から、戦争の真相はこうだった」と社あげて報道する道があつたんだ、思い至らなかつた自分を叱っています。

「絶望」にどっぷりとつかり、恣意的に自己満足している我が身としては、爪の垢でも飲んで、「希望」を繋いで歩きださなければ、と励まされています。なにせ30年先をいって現役なんですから。

【石原 敏（評議員）】

- ① 1967年9月20日 三省堂新書「たいまつ 人間に関する断章 604 詞集」
- ② 2008年7月18日 岩波新書「戦争絶滅へ、人間復活へ 93歳・ジャーナリストの発言」聞き手 黒岩比佐子（『パンとペン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』で、2011年読売文学賞 2010年11月17日没）
- ③ 2011年8月19日 岩波新書「希望は絶望のど真ん中に」

報告

第2回「人権サロン」

「連続大量差別はがき事件」に学ぶ



12月8日(木)、蛍池人権まちづくりセンターで、第2回「人権サロン」を行いました。2003年から2004年の1年半にわたり、差別ハガキや手紙を送り続けられた「連続大量差別はがき事件」の被害者・浦本誉至史さん(左の写真)より、事件の内容や犯人が逮捕されて、裁判で有罪となり、刑を終えて糾弾会をしたことなどについてお話していただきました。

●東京での差別との出会い

東京で起きた事件ですが、もともと浦本さんは兵庫県の地区出身の方で、父親も解放運動に関わっておられましたが、解放運動から逃げたいという思いから、自分の出身が分からない東京へ行けば差別を受けることはないだろう、と思って東京の大学へ進学されました。しかし、入学して間もない頃、学生どうして飲み会をしているときに、一人の学生が「結婚するなら、同和と在日朝鮮人はダメ。同和とは結婚できない」という発言をするのを聞きます。その発言を聞いた後、自分が何を言ったのか思い出せないし、自分の部屋にどうやって帰ったのかも全く覚えていないそうです。その後、下宿から外に出られなくなり、学校にも行けなくなって、半年あまり引きこもりてしまいました。その間、「自分は逃げてきたのに、今さら父や母には相談できない」と一人で悩み苦しんでいました。しかし、このままではどうしようもないと思い、半年ぐらい経って、何としてでも学校へ行かなくてはと思って、自分にムチうって何とか学校へ行き始めました。

ところが、やっと通い始めた大学の授業

中に、また差別発言にあいます。当時はバブルの時代で、学生は遊んでばかりでした。そんな中、教授が「もっと勉強しろ」と怒り、それにつけ加えた話が問題でした。「君らは甘えてる。我々の学生時代はね、今みたいに良い時代じゃなかった。当時は戦後の混乱がまだおさまっていないくて、食う物もない時代だったんだ。だけど、その中でも我々は勉強した。勉強する我々を見て、周りの学生が言った。『あいつらばかだ。食う物もないのに勉強してる、食うのが先だろう。あいつらはきちがい部落だ』と、そう言って私たち勉強している学生のことをさげすんだんだ。でも、それでも我々は勉強したんだよ。だから君たちも、周りのことなんか気にしないで、勉強しなきゃいけないんだ」と、お説教したんです。その後、また怖くて大学へ行けなくなりました。

しばらくして、その発言を部落解放同盟東京都連合会が知り、その教授に対して糾弾を始めました。浦本さんのクラスにも糾弾会のビラが配られ、自分がショックを受けた事件なので行くと、学校の先生方や解放同盟の方が座ってしまし

た。浦本さんは、毎回一番後ろの席にちょこんと座って話を聞いていました。すると、「糾弾会に毎回来ている学生がいるけど、あれは誰や？」という話になり、あるとき解放同盟東京都連の幹部の人が声をかけてきました。そのとき初めて、「実は僕、関西の被差別部落の出身なんです。この大学の学生で、この講義を受けていたんです。それで、ものすごいショックで悩んでいたら、今度こういう話し合いがあるというので、それで聞いてみようと思って来ました」と言うと、「おーそうか、とりあえず都連に来なさい」と言われ、それから、東京都連の紹介で、都内の部落の子ども会に指導員として関わるようになり、今日につながったとのことでした。

●「連続大量差別はがき事件」とは？

この事件は、2003年5月から2004年の10月までの間に、400通以上の差別ハガキや手紙が被害者の浦本さんをはじめ、周辺の住民や、全国のターゲットに一方的に送りつけられるという事件です。ある日突然、「浦本、お前は特殊部落出身のエタである、それなのに、いったいいつまで人間社会にい続けるつもりなのか・・・日頃のストレス発散のために、エタは差別されて殺されればいいのか、お前なんかさっさと死ね、エタ・エタ・浦本エタ史・日本のダニ・エタ」という手紙が届きました。これが一番最初で、99件、全体の被害の4分の1が私宛のハガキや手紙でした。このようなはがきや手紙は、部落差別だけではなくありませんでした。浦本の名前を使って、ハンセン病の療養所へ

も「ハンセン病患者は人間ではない・・・」などといった、非常に差別的な内容の手紙が送りつけられました。

私のアパート周辺には「〇〇区〇〇番地〇〇号〇〇アパートに住む浦本誉至史は特殊部落の出身でエタなんです。土農工商エタ非人のエタです。エタは人間に似ていても人間ではありません。だから豚殺しや牛殺しをしたり、皮革業といった穢れている仕事をしているきたないやつらです。何のためらいもなく牛や豚を殺している残酷で冷酷な生き物です。やつらは部落解放同盟という暴力団よりも恐ろしい犯罪暴力集団を結成していて何かあるとすぐに差別したと言いがかりをつけて、糾弾の名にもとに大勢の人間で襲いかかってきて、強迫的・威圧的に人間を精神的にリンチして、やつらの思想を無理矢理、人間に洗脳します。やつらは自分たちの気が済むまで、人間をつるし、さらしものにしていきます。大変危険で恐ろしい奴らなのです。浦本も、この集団の東京都連合会の会員という大変危険な活動家の一匹です。ウソかもしれないと思うかもしれませんが事実です。みなさんの前ではどのようなふるまいをしているかわかりません。もしかしたらいい人



で通っているかもしれません。しかし、それは仮面をつけた仮の姿であり、本当は大変危険で恐ろしい奴だという事を知って下さい。」という手紙が送りつけられました。

事件は、最終的には刑事事件として裁判となりましたが、始めはなかなか取り合って貰えませんでした。それは部落差別を禁止する法律がないという理由からでした。そこで、マスコミの協力を受けてこの事件を公にして、社会にアピールしていきました。

●なぜ事件は起きたのか？

犯人は東京出身で東京育ちです。東京では同和教育などがほとんど取り組まれることはなく、この犯人も、これまで、被差別部落について学ぶ機会もなく、出会うことはありませんでした。しかし、なぜこのような事件に至ったのか？ 彼は、小・中学と高校・大学まではこれといって問題なく普通に生活してきました。大学を卒業すると、エリート of 公務員になれると思っていました。しかし、現実はそのはずで、大学卒業後も就職が決まりませんでした。日本の企業は一回、就職浪人してしまうと、2年目からは新卒とは扱わないんです。そうなると就職先は見つかりません。彼はこのような状況を10年間続けていました。

そんな中で、お金がなくても好きな本が読める図書館へ行きました。入り口にはその日に入った新刊本が並べてあり、その中の一冊に「同和利権の真相」とい



う本がありました。「同和って何だろう？聞いた事がない」、そう思って手にして中をパラパラ見ると、自分の知らない被差別部落というものの「実態」が書かれていました。彼は法廷での証言で、この本には「同和の人間は税金を払っていない、同和の人間は生活保護の不正受給をしている。同和の人間は公営住宅に不正入居している。同和の人間は、本来その学力がないのにもかかわらず、区役所や市役所に同和枠という不当な枠を設けさせて、不正に公務員になっている。同和の人間はやくざが多い。同和の人間は、人が差別する気もないで、何の気なく言った言葉の言葉尻をつかまえて、『それは差別だ』といいがかりをつけ、糾弾といって集団で襲いかかってくる」とかということが、過去の実例を沢山あげて、具体的に書いてあったんです。

「自分はこれまで部落なんて見た事も聞いた事もないし、部落問題なんてともに関心がなかった。本当に偶然手に取ったこの本以外に部落の事を知る機会もなかったし、知ろうとさえ思わなかった。ただ、公立図書館においてある本なんだから、当然、全部真実だろうと信じたんだ」という証言でした。「俺みたいなエリートが就職できず派

遣労働者としてひどい目にあっているのに、同和の奴らは、人間でなくてごみくずのくせにしやがって、偉そうに人間面してこんなひどいことやっている。絶対に許さない、同和の奴らを徹底的に攻撃してやると思いました」「自分は被差別部落とは何の関係もない。だから、自分とまったく関係のない被差別部落を徹底的に差別して、ストレスを解消しようと思いました」、これが犯行動機でした。

しかし、「同和利権の真相」には個人名が載っていませんでした。これではどこが部落か、誰が部落かわかりません。それで、同じ図書館の人権問題の棚に並んでいる他の本を見てみたのです。そしたら、たまたま「同和利権の真相」の近くに浦本さんの書いた本があって、浦本さんの下の名前が「誉至史」とちょっとカッコいいから許せなかった。同じ図書館に全国の電話帳があったから、それで浦本誉至史という名前を調べたら、全国に同姓同名0、東京都内にただ1軒だけこの名前で登録があったんです。「なんだ、部落民の名前と住所なんて、こんなに簡単にわかるんだな」と思って、ちょっと拍子抜けしました。それで浦本さんを主要なターゲットに選んだんです。他のターゲットも皆な同じやり方で名前と住所を確認し、それではがきを送るリストを作りました。周辺住民も住宅地図で調べたらすぐ分かったんで、それではがきをばらまきました、と証言しました。また「同性同名とかも考えたが、もともと特定の誰かに恨みがあって始めたわけではないので、多少同姓同名があっても気にせず全

員に出しました。「周辺住民に送ったのは別に悪意ではなく、本当に親切心でやったことです。周辺住民も、浦本さんが部落民だと知ると嫌に決まっているから、親切で教えてあげました」。

●「糾弾してください！」

結局、彼は懲役2年という罰を受けたのですが、刑期満了で出所した後、彼と手紙のやりとりをしました。彼はその中でこう書いてたんです。

「今、ようやく自分のしたことの意味が分かった。僕はとんでもなくひどい事をしてしまった。僕を糾弾してください」「どんなに厳しい糾弾でも、自分は受けなくてはいけない」

「私は当時、部落の事を何にも知らなかった。だから、被差別部落の人達の事を思い浮かべる事すら出来なかった。私がこんな事をやる事によって、浦本さんがどんな被害を受けて、そして、どんなにつらい思いをするか、全く想像することすらできなかった。」

自分にとって被差別部落はこの世の中でもっとも遠い存在で、自分とはまったく関係のないというか、外国人みたいなもので、だから自分は全く躊躇することなく、何の痛みも感じずに、ただ恨み、いじめる事が出来た。これはウソじゃないんです。もし、今までの人生で被差別部落の事を知る機会があったら、たとえば、ちゃんとした同和教育を受けていたら、あるいは被差別部落の人と知り合っていたら、僕はこんな事はしなかったと思う」と。

彼だって、「大学を卒業したら就職して、親元から独立して、将来は自分の家庭を持ちたい」、というような普通の希望を持っていました。しかし、大学を出てみたら、それは何一つかなわなかった。それどころか「社会は自分の事なんかどうでもよくて、ごみくずのように扱われている」と本当に思ってしまったんです。それで、そのストレスで、自分を支えられない状態だった。「あのままだったら僕は自殺していたかもしれない」と彼は言っています。

「法廷での浦本さんの被害者としての生の声を聞いた時、これは、とんでもない事をしてしまった、相手は生身の人間だ!」、そのことにはじめて気がついた、その後、刑務所に行っている人との出会いもあって、「はじめて僕は自分のやったことがどんなにひどい最低のことか、ようやくわかったんです」、糾弾会で彼はそう口にしました。彼の話を聞いて、「ウソは言っていない」と思いました。糾弾会をやって良かったと思いました。

●この事件を通して、これから・・・

この事件が、最終解決に至る事が出来たのは、全国のなかまの皆さんが最初から最後まで私たち被害者を支えてくださったからだと思います。心から感謝しています。加害者のS君は部落問題の知識がなかった、そして、自分のやっていることの意味が理解できていなかった。でも、実はこのような事は、今私たちの身の回りでもくつも起こっています。たとえばインターネットでの誹謗中傷です。やっている人たちは何らかのストレスがあって、自分の個

人的ストレス解消の為に自分と関係ない誰かをスケープゴートにして攻撃する、でも自分がやっている事の意味なんて考えてないと思うんです。もちろん悪いことだとも思わない。こういう社会がまかり通っている。今、部落問題なんか学ぶ必要のない問題という考えが、全国で浸透しつつあります。「もう終わった話だ」と言って。でも、もう一度考えなおさなければいけないことだと思うのです。と結ばれました。

お話を聞いて

事前に本を読みましたが、その時は、本当に背筋が凍るとはこういう事なのかと感じました。今回、お話を聞く中で、Sくんは部落問題を知らないままに、このような事件を起こしましたが、その経過を改めて聞き、知らないということはこんなに怖い事だと痛感しました。そして、こんな事件が起きたにもかかわらず、同和教育の必要性が薄れていっているのはどうしてかと思います。部落差別の現実をきちんと知らせるためにも、同和教育が必要だということ、私たち一人ひとりが伝えていかないといけないと改めて思いました。



【文責：福島 智子（事務局）】

映画評

「TESE」

「楽遊ガイド」でおなじみの石原さんにシネ・ヌーヴォーのチケットを頂きました。我が家からはどちらかというところ十三の第七藝術劇場が近いので、こういう機会がないと西区のシネ・ヌーヴォーにまで足を運ぶことがなかなかありません。何かお目当ての映画が始まらないかとホームページとにらめっこしていた昨年末、鄭大世を追ったドキュメンタリー映画「TESE」が上映されることを知り、これは見ないわけにはいかないと、年明け早々行ってきました。

映画は2011年6月、ベトナム・ホーチミンで開催されたサッカー・チャリティー・マッチの入场シーンから始まる。三浦知良、中田英寿と肩を並べて歩く鄭大世^{ちよんてせ}。彼は愛知県出身の在日三世である。朝鮮学校を卒業し、朝鮮大学を出て、2006年Jリーグの川崎フロンターレに入団。翌年、東アジア選手権2008予選大会において、北朝鮮代表として選出された。2009年6月、北朝鮮は44年ぶりのワールドカップ出場を決めた。

2010年、南アフリカで開催されたワールドカップの記憶はまだ新しい。日本も予想以上の頑張りを見せ、「感動をありがとう」や「勇気をありがとう」といった、若干意味のわからない垂れ幕が街中に溢れた。サッカーは個人的に大好きで、時差の関係で23時や夜中の3時キックオフの試合が多かった南アフリカ大会は、ほぼ毎日寝不足だったが充実した日々だった。

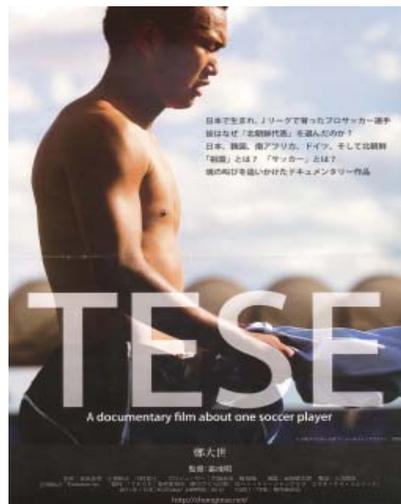
映画はそんな大世を日本、北朝鮮、韓国、ベトナム、南アフリカ、ドイツと1000日間追っている。「自分は北朝鮮の大使になりたい」と、韓国メディアの取材に対して大世は答えた。自国のことや自分の想いを発言する機会がない北朝鮮の人々

のこ
とや、北朝

鮮のイメージを自分をもっともっとアピールしていきたいと、英語で語る大世の眼はとも輝いていた。しかし、北朝鮮代表としてチームに加わるも、なかなかうち解けられず、プレースタイルの違いにやきもきする大世のサッカーへの熱い思いを感じ取ることができた。

韓国戦を前に韓国入りした北朝鮮代表選手団が宿泊するホテルは、北朝鮮からの指示で部屋に設置されているテレビのケーブルを全て抜かれてしまい、情報を得ることができなくなってしまった。テレビも禁止なら外出も禁止なのだろう。敷地内の公園をぶらぶらと散歩する選手たちが画面には映されていた。代表選手に限らず、北朝鮮国民は常に外部の情報を遮断されているのかもしれない。「北朝鮮の大使になりたい」といった大世の言葉が理解できた。

だが、正直な感想を言わせてもらおうと少し物足りなさが残った。1000日間の撮影というわりには、なんと不完全燃焼な85分である。



劇中、監督が大世に質問をしたり、話かけたりするシーンはほとんどなく、監督自身の映画や大世に対する思いを語ることもほとんどなかった。どういった意図で大世を追っているのか、なぜ追っているのかということが語られることもなかった。チラシを読むとそれはあえての演出だったそうだが、そこは語ってほしかった。

大世が自分自身について語る場面も少なかった。その代わりなのか、三浦をはじめ、^{ぼくちそん}朴智星、^{あんよんはつ}安英学、学生時代の監督、元北朝鮮代表選手、エージェント、兄弟、オモニなど、周りの人たちのインタビューがとても多かった。全体的に情緒的な仕上がりになっていて、場面が切り替わる暗転が妙に長かったのと、ずっと流れていたピアノのBGMも耳障りに感じた。

W杯ブラジル戦、国歌斉唱で大世は号泣した。新聞などで取り上げられていたが、映画の中でそのことについて大世の口からは一切触れられなかったうえ、なぜか安英学が「自分たちの国と言われれば、やっぱりそれは北朝鮮だし、北朝鮮の旗を見ると自分たちの旗なんだなと感じる」と、国に対する思いを語っていた。本人への質問がNGだったのか、安英学しかなかったからなのか、取材陣からの「なぜ大世は泣いたのですか？」という質問に対しても安英学が答えていた。

世界最大の祭典と言っても過言ではないワールドカップで、常勝国であるブラジル相手に北朝鮮代表として戦えること。ましてや44年ぶりの大舞台。興奮しない訳が

ない。涙の理由を言葉では表現できないが、感覚としてわからないでもなかった。当時、私も映像を見て泣きそうになった。新聞などでは目にしていたが、もしかしたら映画の中でなにがしかの理由を語るのかもと期待していただけに残念でならなかった。

言葉が少なめだった大世を見ていると、日本でもなく韓国でもなく北朝鮮代表という道を選ぶことが、いちいち語る必要もないぐらい彼の中では当たり前のことなのだろうかと思えてきた。

在日外国人が「日本をどう思いますか？」とか、「自分の国をどう思いますか？」と聞かれることは多い。日本という国に日本国籍で生きている限り、日本人が自分の国について問われたり、日本人であることを意識しながら過ごすことはあまりない。そして日々の生活のなかで、「日本人とは何か？」と考えながら生きている人も少ない。そういったことを自分はどうなんだろうかと、それぞれの人たちへの問いかけとして監督はあえて言葉少なめの編集にしたのだろうか。そんな思いが頭をよぎった映画だった。

全くの余談だが、なぜかW杯開催のたびに私は、飼犬に手を噛まれている。2010年も2006年も噛まれた。現在、12歳の愛犬。二年後のブラジル大会まで生きてくれれば噛まれるのも惜しくないかも。

【森山 輝子（事務局）】

「解放大学」を受講して

【重本 洋輔（事務局）】

2011年6月7日～11月29日に開催された「部落解放・人権大学講座（以下、解放大学）」を受講した。解放大学とは、社団法人部落解放・人権研究所が主催する部落問題を含めた様々な人権問題についての連続学習講座のことで、今年で37年目を迎え、これまで企業、行政、宗教団体、市民団体などから約384団体、約4683人が受講しているという歴史の長い講座である。

今回、101期生として、企業や行政・法人などから来られた方々と共に、部落問題や在日外国人問題、女性問題、障害者問題などについて学習し、また、ワークショップやフィールドワークなどのプログラムを通して、知識と共に受講生同士の交流についても深めていくことができた。期間にして半年間、日数にすると26日間、今にして思えば、長いようで短いような日々だったが、ここでは本当に多くの学びがあった。

中でも7月～8月にかけておこなわれた「自己啓発学習」については、様々な意味で一番の学びであったと思う。「自己啓発学習」とは、部落問題や人権問題を他人事ではなく自分事として改めて捉えなおすことを目的に、受講生それぞれがこれまでの人生の中での部落問題や人権問題、差別との出会いについて振り返り、それについて、同じ班のメンバーの前で発表していき、班で議論しながら共有して

いくといったプログラムである。

僕の場合、人前で発表することを前提に自分自身について振り返る際、これまでの部落問題との関わりについて外すことはできない。それは必然的に自分自身が部落出身であることについても触れることになる。つまり、自分自身の振り返りについて発表するということは、自分が部落出身であることについて班のメンバーの前でカミングアウトすることにもなる。また、このときは解放大学が始まってまだ1ヶ月ほどであり、班のメンバー一人ひとりが「どういった人なのか?」、「部落問題についてどのように思っているのか?どのように考えているのか?」など、知らないことが多かった。

だから、大変失礼なことだが、「この人たちは部落問題を理解してくれるだろうか?」、「変に解釈されたり、誤解されたりしないだろうか?」、「空気や雰囲気が悪くなったりしないだろうか?」といった不安は確かにあった。だが、今回は「自分と部落との関係や自分が部落出身であることについて触れずして何を語るのか?」といった思いや、「ここで自分自身を偽るようなら、解大で学ぶ意味はない」といった思いの方が強かった。だから、発表の際、初っぱなから自分が部落出身であることを告げた。そして、解放会館での「子ども会」活動を通して部落問題や部落差別について勉強してきたこと、中学時代に部落差別の

存在や自分が部落出身であることを強く意識したこと、最後に、現在の自分自身の思いについて語った。

メンバーの方々から変な反応が出ることは一切なく、それどころか「部落の人から身近な話が聞けて良かった」といった感想までいただいた。また、それぞれから部落問題についての思いや考え、素朴な疑問などについても聞かせていただくことができた。このとき、部落出身であることも含めた上で、皆が僕を受け入れてくれたような気がして、とても嬉しかったことを今でも憶えている。

その後もメンバーの方々からの発言を踏まえながら、何度も自分自身を振り返るといったことになるのだが、今回、徹底的に振り返ることで、部落出身であることも含めた自分自身について改めて見つめ直すことができた。今にして思えば、これほど

自分と部落問題との関わりについて考えたことなんてなかったかもしれない。そういった機会を得ることができただけでも十分貴重な体験だった。

また、メンバーの方々からの振り返りからも多くの学びがあり、それぞれの体験談をとおして、部落問題や人権問題を「自分事」として考えることの重要性はもちろん、それぞれの問題との「出会い方、捉え方、関わり方、繋がり方」の重要性について改めて考えることができた。

6月7日からスタートした解放大学101期生55名の学びについては、11月29日を持って終了したが、学びはここで終わりではなく、これからもそれぞれが様々な機会をとおして学び続けていくことになる。今後もこの101期生55名との出会いや繋がりを大切にしていきながら、部落問題や人権問題について考えていきたい。

情報BOXとよなか 人権文化のまちづくり講座

映画「橋のない川」

と き：3月16日（金）午後6時30分～

ところ：豊中人権まちづくりセンター2階

定 員：50名 当日、会場にて受付（事前申込みも可能）

費 用：無料 どなたでも参加いただけます。

【あらすじ】

1908年（明治41年）、大和盆地（奈良）の山村・小森。畑中誠太郎と孝二の幼い兄弟は、父を日露戦争で失ったが、しっかり者の祖母“ぬい”と心優しい母“ふで”に大切に育てられる。やがて小学校に通い始めた二人だが、そこには思いもかけぬ日々が待っていた。兄弟は小学校や路上で、ことごとくにいじめられる。小森は被差別部落なのだ…。

（92年製作 監督 東陽一 上映時間139分）

第五中学校、克明小学校、箕輪小学校の教職員、人権まちづくりセンター保育所の保育士、児童館職員、地域の保護者、OB・OGなどが集まり、部落問題学習をどう進めていけばいいのか、子どもにどう部落のことを伝えたらいいのかなど出し合い交流をしています。今年度（2011年度）は教員をはじめ、人の入れ替わりが進む中、新しい人たちに「はみごのないまちづくり」を願う「夢バトン」を手渡すために、部落問題学習を見つめ直すことを大切にしていこうと、それぞれのところで部落問題学習の現状を出し合っています。

一回目は6月22日に、第五中学校から「夢バトン・はみごのないまちづくり」、克明小学校から「みんなでぼかぼか、誰もが安心できる学校づくり、まちづくり」の実践を通してのお話しをしていただきました。二回目は12月13日に、人権まちづくりセンター保育所から「ここの保育所にきてこだわってきた思い」「1才児の子を大人がどのように尊敬するのか」、児童館から「児童館で大事に思うこと」の自分についての話や具体的な取り組みについての報告がありました。

二回目がもたれたちょうど前日、自分たちの子育てについて、お互いに見合っ、泣いたり笑ったりしてきた仲間とこんな話をしていました。赤ちゃんのときから解放会館保育所へ行って、そこで小さいながらも人が好きで、人のことが気になる、そ



のようなことをとても大切にされていて、些細なことでもおかしいことはおかしいなど厳しく、優しく受け止めてもらい育ってきたこと、そのことをきっちり親と保育士で話が出来たこと、小学校では、いろいろなこだわりを持って子どもに関わり、子どもに力をつけてもらったこと、中学校では「夢バトン・はみごのないまちづくり」のとりくみで、自分たちが部落であることを隠さなくても安心していれるなど、大きな力をつけることができたこと・・・などなど。

いろいろな人たちとの関わりにより、親子の信頼関係、しっかりした絆を築くことができたと思います。そして、保育所も児童館も小学校も中学校も地域のおとなも部落問題と真剣に向き合い、考え合い、少しずつでも行動に移すことが、子どもたちが育っていく中でとても大きな力になっていくことを実感しています。保育教育協議会でこれからも、一つ一つを丁寧に積み重ねていきたいと思っています。

【酒井 留美（事務局）】

1月30日(月)、蛍池公民館にて、2011年度ひゅうまんプラザ講演会がおこなわれ、大阪人権博物館(リバティおおさか)の学芸員である裕夕記さんから、当時の女性問題や女性運動についての話を聞くことができた。

「青鞥」とは1911年に平塚らいてうをはじめとする女性たちの手によって発刊された「女性による女性のための文芸雑誌」の名称であり、発刊から100年になる。「青鞥」の意味は、「Blue Stocking(ブルーストッキング)」の和訳であり、18世紀頃、ロンドンでおこなわれた文芸愛好家によるサロンで、出席者の女性が青い靴下をはいていたことから文芸趣味や学識のある女性のことを意味する言葉として使われるようになったそう。

創刊号で平塚らいてうは「元始、女性は実に太陽であった、真正の人であった」と宣言し、また与謝野晶子は「すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる」と女性の覚醒を謳いあげるなど、「青鞥」は当時の女性に対する古い習慣や考えを打ち破り、「新しい女」として主体的に生きていくといった主張を広めていくことになるのだが、当時は、女性は良妻賢母であることが求められ、結婚して子どもを産むことが女性の幸せとされてきた時代だ。また、女子大学や高等女学校などで女子教育がおこなわれてきてはいたものの(平塚らいてう、保持研、中野初、木内錠など、「青鞥」

に関わったメンバーもそれぞれ当時の女子教育を受けている)、あく



まで「子供を産み育てる役割を持つ女性がいつまでもおろかなままではいけない(近世では女性は「おろかである」とされてきた)」といった意味でおこなわれていたものであり、さらに「女性が教育を受けることで男性化し、それによっていずれ国が滅ぶ」といった「女学生亡国論」や、知識や教養を身に着けた女性が自由にふるまったり、発言をするのが「生意気である」といったような批判も多かった。また、女性には選挙権がなく、政治活動も禁じられるなど、女性差別が当たり前のように存在していた時代であった。

「青鞥」はそのような時代に、「女性の自立」を主張する目的で発刊された雑誌であったため、「新しい女」は、「ふしだらな女」を意味する言葉として当時のマスコミや文化人に扱われるなど、批判も相当なものだった。だが、そんな中でも恋愛や結婚、性をテーマとした小説や詩を多く掲載し続け、また貞操、墮胎、廃娼問題についての論争が繰り広げられるなど、当時の社会に大きな影響を与えた。

女性が主体的に生きるための運動は、1970年代の「ウーマン・リブ」などもあり、現在も様々な形で続けられている。「青

「轆」はこういった女性運動のいわば原点である。かつて青轆が主張してきた身体や性の問題、結婚や出産の問題、セクシャルハラスメントの問題などについては、現在も残されており、また、ステレオタイプの「性別役割分担意識」や「男らしく女らしく」といった考え方についてもなくなってはいない。古くから根付いてきたものを

変えていくのは難しいし、時間もかかるだろうが、そうやって改めてきた歴史がある。だから、どんなに時間がかかったとしても、性別に関係なく誰もが人間として、自分らしく生きることができる社会をつつていかなければならないと思う。

【重本 洋輔（事務局）】

蛍池地域から

地域から「人権と共生」を考える

2月5日(日)午後1時から、第十八中学校の体育館で「第16回ふれあいフェスティバル」を開催しました。寒い日でしたが、会場いっぱいの参加がありました。

昨年より、第一部の「ヒューマンライツ・アイ」では、「であいふれあい大賞表彰式と発表」を行っています。これは、「ふれあい月間（2月）」に向けた取り組みとして、昨年の7月19日から11月10日に、人との出会いの中で、「心に残ることば」、「人のあたたかさやぬくもりを感じたことば」の募集を行い、848名の方から応募がありました。

「審査委員会」で中学生の部と一般の部で、それぞれ審査をしていただき、入賞者10名を選出しました。今年度の大賞はありませんでしたが、優秀賞・優良賞・佳作10名のうち、7名の方に参加していただき、「言葉の発表」をしていただきました。昨年は、代読が多かったのですが、今回は受賞者からの発表だったので、とても良かったとの感想が寄せられました。

第二部の「響き合う仲間たち」では、第十八中学校



の2年生の職場体験学習の発表や吹奏楽部の演奏をはじめ、蛍池小学校の4、5年の表現発表や蛍池保育所と保護者会の発表、蛍池公民館のサークルの「ハートフルサウンド」さんの障害をもつ方々の歌と演奏、刀根山小学校の4年生の発表がありました。また、地域の保護者が集まって、12月から取り組んできた「子どもの事を考える学習会」を取り組む中での発表として、スライド絵本「はやくはやくっていわないで」の発表と、取り組みを通して自分のことと重ねた事等を発表してもらいました。

地域全体で「人権と共生」について考える機会になり、また、来年度の取り組みへつないでいくことが出来たと思います。

【福島 智子（事務局）】

書評・この1冊

本書は、「飛田」を足かけ12年にわたって取材した結晶だ。要した年月が示すとおり、生半可な道のりではない。何よりも「当事者」が誰も口を開こうとしないのだから無理もない。しかし、著者の執念にも似た一途な想いに惹かれるように、一人また一人と呼び寄せられ、その口から「色街」の一端が明かされる。もちろん、ここにすべてが凝縮されているわけではないが、その街とそこに生きる人たちの今が丁寧に切りとられ、悲哀に満ちた人生が活写されている。

読み進むうちに、「一度…」との誘惑と好奇心に駆られることは不可避だが、著者は「あとがき」で、「なお、本書を読んで、飛田に行ってみたいと思う読者がいたとしたら、『おやめください』と申し上げたい。客として、お金を落としに行くならいい。そうでなく、物見になれば、行ってほしくない。そこで生きざるを得ない人たちが、ある意味、一所懸命に暮らしている町だから、邪魔をしてはいけない。」と言う。完璧に下心は見透かされるが、これは著者ならではの重たい言葉だ。

誰しも安楽で、安全で、快適なくらしを紡ぎたいものだが、そこから弾き飛ばされることもあるのが現実だ。結果、人生の辛酸をなめ、さまざまな事情と経緯を経て、人はそれぞれの時を生きることになる。それは自身が選び取ったものでは

「さいごの色街 飛田」

あると同時に、そうせざるを得ないのであり、選択の幅はそれぞれが置かれた状況によって異なる。

しかし、人はそこで生きていくし、いかざるを得ない。だからこそというべきか、いまなお飛田がそのままに存在し続ける意味もそこにある。

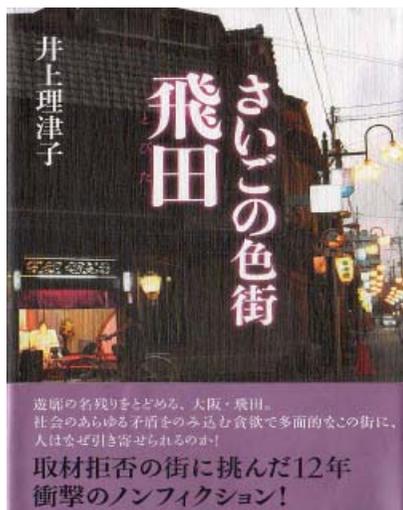
著者は、「はるか昔に売春防止法ができたことも、『人権』なるものが世に存在することも知らないような町…」と「はじめに」で書いているが、飛田に生きる人たちは、したたかだ。現実を知り尽くしたうえで、何食わぬ顔をして生きる術を身につけており、それは今も昔も変わらないように思う。

線引きはされても、きれいに二つにはならないことは、この世にいっぱいあるが、飛田もその一つだ。みんなが知っているけれど、知らないことになっている。何とも不可思議な空気と息づかいが伝わってくる一冊だ。

●井上理津子(著)

(2011年10月/筑摩書房/302頁/2100円)

【佐佐木 寛治(事務局)】



一人で悩まないで...

人権侵害をうけるおそれのある市民が、自らの主体的な判断により課題を解決することができるように、事案に応じた適切な助言や情報提供などにより支援をおこないます。

人権相談をご利用ください

時間：午後 1 時 ~ 5 時

月・水・金→蛍池人権まちづくりセンター(06-6841-2315)

Eメール bpazk307@tcct.zaq.ne.jp

火・木・土→豊中人権まちづくりセンター(06-6841-5300)

Eメール bpayf811@tcct.zaq.ne.jp

あ・と・が・き

◆「部落差別とは何か?」「どうしたらなくすことができるのか?」という問いがありますが、これに明確に答えることは簡単ではありません。問いがシンプルであればあるほど、答えは難しいのだと思います。折しも今年、全国水平社が創立されて90年になりますが、これはその答えがしの時間であったということもできます。いくつかの回答が試みられ、相応の成果をあげてきたことも間違いありませんが、いまだ旅の途中にあります。この旅もいつか必ず終わるはず。やはり、倦まず弛まずでしょうか。◆まもなく訪れる「1年」を前に、想いは巡りますが、二つの言葉がとまります。「わたしはいま、被災地から遠く離れた東京にいて、いわば快適な環境から、かぞえきれない死者たちの霊と、すべてを失ってしまったたくさんの被災者、友人たち、不安にかられている人びとにむかってなにかを書こうとしています。正直、そのことがなにか罪深いことのようにも思われてなりません。」(辺見庸)、「事の本性上、われわれもいつ彼女ら彼らのようになるかわからない。そういう意味ではわれわれと彼女

ら彼らの立場には『相対的』な違いしかない、とは言えます。しかしこの相対的な立場の差異じたいが『絶対的』である。ゆえに、たやすく代弁の言葉を語ること、そして安易なおのれと「彼女彼ら」の同一化をおこなって感情的になったり『説教』を行うことは、私のなかの何かが強く禁じます。しかし、その上で、一体何ができるだろう。何かしなくてはならないとしたら。」(佐々木中)◆たやすくは語れないとの思いと、何かを発しなければとの思いが絡み合っ、身動きがとれなくなります。もちろん、私一人がどうこうしたところで、事態はどうなるものでもないことも知っていますが、眼前にする被災者や被災地の悪戦苦闘を見るにつけ、知るにつけ、心が騒ぎます。私は私の場所から問題を見つめ、繋がる回路をつくり、広げようと思います。差別や人権問題の取り組みと同じです。◆今号は盛りだくさんになりました。書き手それぞれの個性がこじみ出ています。感想・意見、投稿歓迎します。次号は6月の予定です。

●編集・発行

一般財団法人

とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北3-13-7 豊中人権まちづくりセンター内

TEL 06(6841)5300 FAX 06(6841)6655

Eメール jinken@tcct.zaq.ne.jp

ホームページ <http://www.tcct.zaq.ne.jp/jinken/>

郵便振替 00960-8-153806